

## 第4章 木下是雄先生を囲んで

### 目次

第1節 木下是雄先生のお話
第2節 木下是雄先生との話し合い

### 第1節 木下是雄先生のお話

甲斐△ それでは、これから第5回の教育チームの会合を開きたいと思います。今回は、木下是雄先生にお出でいただきまして、先生の国語教育へのお考えをお聞きすることにしたいと思います。我々は、前にお手紙を差し上げましたように、今度の新しい学習指導要領の改訂のための資料ということで、どのように国語教育を考えていったらよいか、国語教育の現場を調べることに、日本語教育の、外国人の子弟の教育を考えるということ、帰国子女を考える、いろいろな方面から国語教育の問題にアプローチをしたいと思っております。その中の一番大きな仕事として、識者のお考えをお聞きしたいということがあるわけです。今回は、国語に対して非常に素晴らしいお考えをお持ちの木下先生にお出でいただきましたので、お考えをお話しただければ、私どもは非常にありがたいと思っております。予定としては、これから1時間ほど木下先生にお話しただいて、その後いつものように、1時間ほどご質問を差し上げるという形で行きたいと思っております。先生、よろしく願いいたします。

#### 五つのポイント(要望)について

木下 私国語教育に関しては全くの素人で、現場を見たこともあまりないのです。私自身が国語教育を受けたのは70年近く前で、そのころの記憶はいくらかありますけれども、それは今の国語教育とはずいぶん違うのだらうと思っております。

一昨年9月だったと思いますが、水谷所長が司会をされて、文化庁で、「言葉の教育をめぐって」という座談会をやりました。私もそのメンバーの一人として加わっていて、その記録が、ご存じかもしれませんが、こういう本『ことばシリーズ40 ことばの教育』(文化庁、1994)になって出ています。今回皆さんにお話しをすることを頼まれてこれを見たのですが、どうも私の考えはその時からちっとも進歩していないので、私の話はこの本とかなり重複するところがあると思っております。そのことをお許し願いたいのです。

今日私が申し上げることは、およそ四つに分かれます。第1番目は、受信と発信という言葉を使いますと、国語教育の中でもっと発信に重点をおいて欲しいということです。言うまでもなく、発信とは話すこと書くことです。逆に受信、つまり読む、聞くの面では、言葉の世界の中に閉じこもってしまわないで、もっと「中身を受け取る」ことに重点を置いた教育をしていただきたいというのが私の考えです。つまり、言葉を言い替えることはちゃんとできるのだけれども中身がちっともわかっていないという例がたくさんあります。これは我々自然科学者にとっては大変に困ることなので、是非、

中身をちゃんと受け取る訓練をしていただきたいというのが、私の願いの一つです。これが第2番目。それから、第3番目に申し上げるつもりなのは、今の子供たちは、教科書に書いてあることを読んで理解することはできるとしても、例えばこの灰皿はどういう灰皿かということを入人に説明する、そういう種類のことが大変苦手なようです。つまり、自分の持っている印象、あるいは自分の持っている知識、あるいは自分の観察を、言葉に直す、言語化するというプロセスの訓練が抜けているように思います。2番目に申しました、言葉の面ではわかるのだけれども、中身を受け取ることができない

ということも、発信の面で見ると受信の面で見るとのちがいで、本質的に同じ問題だと思うのですが.....。そういう点で今の国語教育は、言葉の世界に閉じこもっていて、外界とのつながりが大変希薄であるというのが、私の印象です。国語に限らない、英語教育もまさにそうなのです。後でお話しいたしますけれども、昔の話ですが、私の研究室に卒業実験の学生が入ってきて、その連中に英語の論文を読ませます。そうすると、それを日本語に直すことはできます。つまり言葉の世界の中でのコミュニケーションはきちんとできている。けれども、「それでは、今、君が言っていた装置の絵を描いてごらん。」と言うと、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をするのです。要するに、言葉で伝えていることと、その言葉が伝えようとしている外界のものがちっともつながっていないというのが私の大変強い印象なのです。これは英語の論文を読むときに限らないので、日本語の、国語教育の世界でも全く同じで、その点が抜けているように思います。乱暴な言い方をすると、そのことが、甲斐さんがあらかじめ私に送って下さった20の問題 このチームでおやりになるおつもりの20の問題の中にも、それに相当するものが抜けているのではないかと考えます。そこが私にとっては、非常に大事なポイントだと思われるわけです。それが3番目です。

4番目は、今日は義務教育を話題にするというお話なので、それには該当しないのですが、国語教育の背景になるものとして、まず、日本語とはどういう成り立ちの言葉かという話を、小学生、中学生には無理かと思いますが、少なくとも高等学校の段階では、国語教育のイントロダクションにさせていただきたいと考えます。日本語の起源に関してはウラルアルタイ語云々という話もありますし、大野晋さんのタミル語云々という話もあります。それらはともかくとして、いわゆる、大和言葉が日本語の根元になっていることは間違いないでしょう。それに中国文化の影響が加わっているし、ヨーロッパ文化の影響がある。中国文化の影響というと、いちばん先に思い浮かぶのは漢字、漢語でしょう。しかし漢語はぜんぶ中国文化が移入されたものかということ、過半数はそうかもしれませんが、実はいわゆる漢語の中にヨーロッパ語がたくさん入っている。例えば、「個人」あるいは「自由」。こういう言葉は、実は中国文化にoriginがあるのではなくて、ヨーロッパのideaを日本人が一生懸命漢語のかたちになおしたのである。そういう意味で一見漢語のごとく、中国文化を移入したものであるかのごとくに見えるけれども、実はヨーロッパの文化を移入したものであるという例がたくさんある。そういうものが混じって、いま我々が使っている日本語が成り立っているのです。今の日本語には、野本菊雄さんの言葉を借りると「言葉の異なりの数」、言葉の種類としては漢語やヨーロッパ語の方が多いかもしれない。出現頻度でいえばもちろん大和言葉の方が多いでしょうが、大和言葉は、言葉の異なりの数で言えばそんなにたくさんないのではないのでしょうか。国語教育の教科書を書くときの根底に、そういう見方が必要なのだろうと私は考えます。それからもう一つ、日本人のものの言い方、私の流儀でいうと言語習慣ですが、日本人の言語習慣が他の国の人達の言語習慣といかに違うか。もちろん、いろいろな国の人達のものの言い方にはそれぞれの特徴があるのですが、その中で日本人のものの言い方がほかの人達といかに違うかを考えることがぜひ必要だと思います。つまり、我々がしゃべっていることを非常に正確に、英語、ドイツ語、フランス語に直したとしても、意味が通じない部

分がたくさんある。これだけ方々の国の人達とのつき合いが広がってくると、子供でもそのことを知っておいてくれないと困る。具体的にどう違うかということは、高等学校あるいは大学になってからでもいいと思うのですが、同じことに対するものの言い方が、国により民族によって非常に違うのだということを、国語教育の中に入れていただきたいということが私の願いです。これは小学校の段階では適当でないかも知れませんが、少なくとも教科書を作ったりする方は、そういうことをいつも頭の中においていていただきたいと私は考えます。だいたいそういうことをこれからお話ししようと思うのです。

最初に、もっと発信に重点をおいて欲しいという話をいたします。私が小学校に入りましたのは、大昔のことで1924年、大正13年なのです。そのころには、時間割には国語とは書いてなくて、「読み方」とあったと思うのです。事実、私達が最初に習ったのは読み方です。確かハナハトマメマスという教科書だったと思います**が.....**。

このあいだ九州の綾という小さな町に行きました。お城があって、郷土館というものがある。その中を見ていたら、私達の使った教科書がおいてあって、「私達の先祖の使った教科書」と書いてあるのです。大変懐かしかったのですけれども、先祖にされたのには驚いた。これは余談です**が.....**。

### もっと発信に重点を置いてほしい

本題に戻って、読み方から始まるのは、漢字かな混じり文を建て前とする今の日本語の教育としては、宿命的なものかもしれないのですが、とにかく他の国、例えばヨーロッパ系の国の言葉の教育に比べて大変違うと思います。欧米その他では、言語教育は読み方から始まるのではなくて、話し方から始まります。その**typical** な例は、ご存じだと思いますが、アメリカやその他の国では言葉の教育は**Show and Tell** から始まるのです。どういうことかということ、幼稚園生あるいは小学校の低学年の生徒に、「明日君たちの好きなものを持って来なさい」と先生が言う。女の子が例えばお人形を持ってくるとする。先生は、その子に仲間の生徒たちの前に立ってそれを見せて、「これはどういうもので、自分とどういう関係があるのかを説明しなさい。」という。女の子は、「これはこの前の私の誕生日に私のおばさんが私に下さったのです。私はこのお人形が大好きで、毎晩抱いて寝ます」というようなことを、子供たちに向かって話すわけです。それが言葉の教育の第一歩であって、読み方よりも先に話し方 きちんと話すことを教えるのだと私は理解しています。

この**Show and Tell** という授業の中身を分析的に考えてみると、そこで教えるのはまず第一に**social speech** だと思います。つまり、相手はどういう人で、自分の話そうとすることに対して、どれくらいの予備知識を持っているかということを一応念頭に置いて 子供の場合にはそんな難しいことを考えるはずはないのですけれども とにかく、自分の兄弟に話をするのとは違うと思って話をする練習ですね。自分の家族とは違う人に話をするのですから、子供は考えて、一応言葉にも気をつける、どういう言い方をしたら相手がわかってくれるかを考えながら話す。そういう相手を意識した話し方、**social speech** の教育の第一歩だと私は思うわけです。

**Show and Tell** の第2番目の意識は、人にものを説明する練習ということ。つまり、**exposition**の教育の第一歩だと思うのです。自分が話そうとすることの中身を知らない人に説明する訓練の第一歩ということですね。人にものを説明するにはどうすればいいかを教えることが、私は国語教育の根本の一つだと思うのですけれども、どうも日本の国語教育にはそれが抜けているような気がしますね。日本人の書いた例えばワープロの説明書は、わかりにくいという定評があります。あれはそもそ

も、人にものを説明するにはどうしたらいいかということを知ったことのない人が書いているから、ああいうことになるのだと思います。学校の先生も、だいたいにおいて人にものを説明するにはどうしたらいいかということを知っていないのです。小学校の先生はわりあい良いと思うのですが、一番ひどいのは大学の先生で、わかるように話するにはどうするかという心得がない。私自身も大学の教師でしたが、仲間を見ていて、あるいは私自身の言動を見ていてそう思います。お人形の話、そういうexpositionの練習というのが第2番目の目標なのでしょう。

第3番目の要素は、大勢の人に向かって話すpublic speaking。これも日本の国語教育の中に入っていないようですが、public speaking，大勢の人に向かって話すときの話し方は、やはり教えておかなければいけない大切な要素だと思います。

Show and Tell から教育が始まるのは、言葉の教育の出発点において、日本のやり方と他の国のやり方が違うことを示していると思います。Show and Tell の話をやや詳しくしたのはそういう意味なのです。

私が日本のある幼稚園の先生にこの話をしましたら、「私はShow and Tellという言葉は今初めて聞いた。けれども、私の幼稚園では、いつも月曜日に、昨日の日曜日には何をしたかという話を、子供達にさせることにしている」というのです。子供の方は大変はりきって、明日はどういう話しをしようかと用意してくるということでした。これはすばらしいことだと思います。そういう教育が義務教育の国語教育の中にも入っていて欲しいものですね。

発信に重点をおくというのが私の話の第一のポイントですが、その具体例として、読み方の代わりにShow and Tell，人に向かって話をするところから教育が始まる国もあるというのが、今申し上げたことです。そういう国では言語技術の教育が、教育の根本になっています。言語技術は、英語でいえばLanguage arts，あるいはcommunication skillです。どういうことかと言いますと、人によって定義が違うかもしれませんが、私は、第1に、事実や状況を伝えるには言葉をどう使うべきか、その心得が一つの言語技術だと思う。それが第1番目。第2番目は自分の意見、あるいは自分はどのようにしたいのだという意図を人に伝える時にはどう言葉を使えばいいのか、それが言語技術の第2の面だと思います。第3番目に自分の気持ち、心情を人に伝えるには、どう言葉を使えばよいか。この三つの場合の言葉の使い方を教えるのが言語技術の教育だと思うのですが、このうち第3番目の心情の伝え方という点に関しては、日本の国語教育は立派なものだと思います。あまりつけ加えるところはないという気がする。第1番目の、事実や状況を伝えるにはどうすればよいかとなると、日本の国語教育は大変弱い。意見や意図を伝えるにはどうすればよいか、という点に関しても日本の国語教育は弱いと思います。これはさっき申しました、話し方から始めるのではなくて国語教育が読み方から始まるということと、根底において合い通ずると思うのです。

ご存じの方もあるかと思いますが、私は学習院におりましたときに、学習院の初等科、中等科、高等科のための言語技術の教科書を試作しました。大勢の先生方と一緒に作ったのです。小学校3・4年用、5・6年用、中学校用、高等学校用と4冊作りました。その3・4年用の第1課はどう始まるかというところ、生徒が先生のところに来て、「先生、傘」と言う。先生が「傘がどうしたの?」「ないんです。」「忘れてきたの? 今朝は雨が降っていたじゃない。」「持って来たんです。」「その傘どうしたの?」「ないんです。」「かけたところがないの?」「そうなんです。」「そこで始めて先生は意味がわかるわけです。朝、学校に来て傘かけに傘をかけておいたのだけれど、今、行ってみるとそこにない。」「そうか」と先生はそこで探しにいくわけです。この傘の話は、今の国語教育は「子供たちは皆ものを話すことはできる」という信念に立ってスタートしているように私には見えるので

すが、それは間違いだということの一つの証拠と思います。この章の題名は、「用事を頼む」ですが、人に用事を頼むには相手がわかるように説明しなければならない。つまり、「今朝、学校に持って来た傘を傘かけにかけておいたのだけれども、今いってみるとそれがない、先生探して下さいませんか」と言わなければならない。こういうことを教えるのが、今申しました言語技術教育の「意図を伝えるには」に相当するわけです。意図を伝える方法をちゃんと知っていないと、今の傘の話みたいに、いくつもいくつも言葉を交わさないと、自分の要求が相手に通じないことになってしまう。そういうものの言い方をする人が大人でもたくさんいますね。言語技術の教育はまさに必要なのです。

言語技術の教育を特に強調している国は、アメリカとフランスかもしれません。ご存じだと思いますが、アメリカのいわゆる「国語」の教科書は、片一方に言語技術、Language arts という教科がある、それに呼応して、読解Reading という教科がもう一つ並んでいるわけです。Reading の方でやっているのはだいたい日本の国語教育に近いことなのですが、Language arts のウエイトが違う。中身も違うのです。アメリカのごく低学年の教育は、Language arts の教育が主流になっていて、理科や社会はゼロに近いと思います。しかし考えてみますと、理科や社会に必要な「言葉でものを表す」というプロセスには、抽象能力と言語技術が必要なわけです。例えば、この灰皿はどういう灰皿だということを人に伝えるには、これはどのくらいの大きさでどのくらいの重さだとか、ガラスでできているとか、いろいろな枠でこれを見ることを知っていないとできません。これは、抽象能力だと思のです。もう一つ別の例を引きますと、「外は今、どんなお天気ですか？」と聞く。子供がそれを言おうとすると、いま見た天気を抽象化して、短い言葉に置き換える能力が必要になります。言語技術は抽象能力の養成という意味で、小学校式に言えば、全ての勉強の元だということになるのです。大人の世界で言えば、ものを理解し、考えることの元は言語技術にあるということになるのかもしれない。低学年で理科や社会は教えず、最初に重点をおくのは、Language arts だということは、いま言ったようなことが念頭にあるのだと思います。

同時に、言葉を組み立ててものを言うためには、どうしても論理が必要なわけです。抽象能力と論理とは、自然科学に限らず、全ての学問にとって、根本的に必要なものなので、「Language arts から教育を始める。初めはそれだけでよしい」という考えは、いい線を行っているのではないかと私は考えます。Language arts は、“言葉による発信能力の養成”と言ってもいいわけですが、今までお話ししたようなことが、発信に関して私が申し上げたいことです。

## ことばの世界で閉じないで、中身を受けとることを教育してほしい

そこで第2番目の話題、今度は受信の方に移ります。さっき申し上げたことの繰り返しになりますが、国語教育は言葉の世界の中だけで閉じてしまっている現状をあらためてほしいというのが私の要望するポイントです。「言葉の世界の中で閉じている」というのは、「読み解く」というプロセスが、ことばを置きかえる、あるいは文章表現を変えるというところで止まってしまって、中身の把握に至らないという意味です。中身の把握というのはどういうことかと言いますと、さっきもお話ししましたが、私の研究室に入ってくる4年生に対して私がいつも感じていた不満を説明するのがよしいかと思います。研究室に入ってきた4年の物理の学生に英語の論文を読ませてみますと、言葉の世界では英語を日本語に直す能力があるのです。おかしいところもあるけれど、だいたい正しく翻訳することはできる。けれども、「では、今、君が説明していた装置の絵を描いてごらん」と言うと描けないのです。「そんなこと夢にも考えたことがない」という顔をします。これは結局、言葉の世界の

中だけでは伝わっているけれども、その背後にある本当の中身は伝わっていないということです。たまたま英語の論文の話をしたのですが、日本語の論文でも事情は同じです。論文を読むということが言葉の世界の中だけでつながっていて、その背後にある中身の世界につながっていないのです。受信という面では、私は一番の問題はそこにあると思います。

それにはどうすればいいかということですが、この前、文化庁の「言葉の教育をめぐって」にのっている座談会をしたときに、教育研究所の永野重史さんがこういう話をされました。鳥の絵をいくつか描いて持って来て、隠しておく。一人の生徒だけにそれを見せて、「これがどういうものをみんなに説明しろ」というのです。その鳥の絵はかなり模型化されて、説明し易いようになっているのだそうです。それを一人に見せて説明をさせる。その説明を聞いた生徒たちに、「今の話のものを絵に描いてごらん」という。そこで、みんなでその鳥の絵を描くわけです。ところができあがった絵はみんな違う。ある程度違うのは当然ですけれども、大変違うのです。そこで、では、本当に元の絵に近いような鳥をみんなが描けるようにするためには、どう説明をすればいいのだろうか　そういう話し合いに進んでいくのだそうです。

今の例ならば、鳥の姿が伝えるべき中身です。それを言葉で伝えても、なかなか中身が伝わらない。中身を伝えるにはどう言葉を使えばいいかというのは発信の側における言語技術の問題ですが、読む方　受信側　では、いつでも中身の方が頭に入ってくるような読み方をする訓練をしていただきたいというのが私のお願いであるわけです。

さっきアメリカの小学校では、低学年では、Language arts の教育が主流であるという話をいたしました。例えばどうしているかということ、たとえば絹の生地を持って来る、ナイロンの生地を持って来る、毛織物の生地、木綿の生地を持って来る。そこで、それぞれに触ってどういう感じがするか、どんな布かを言葉で書けということです。絹やナイロンという言葉は抜きにして、4種類の布について、これはどういう布であるかを説明しろというわけです。これはつるつるしている、ざらざらしている、冷たい感じがする、あったかい、やわらかい、堅い、そういうことを言わせるわけです。さっき私が言っていた言語技術というのは、まさにそういうことなのです。中身として伝えたいのは、布がどういう布かということなのだけれど、そのためには、どう言葉を使って説明すればよろしいか。発信側でなくて受信側の言語技術としては、言葉で書いてあることを、その布自身の感じを実感的に想像しながら読む。こういう読み方の訓練も全く同じように必要だと思う。

こういう話によって、鳥の絵の話にしても、布に触ってみる話にしても、教科書だけを通して言語の教育をすることの弱みを感じとって頂けたでしょうか。教科書だけを通して教育をしていると、どうしてもそれは、ある言葉を言い替えるだけのことになってしまう。「わかった」というのは、難しい言葉で書いてあるものが、生徒にわかるような言葉に移されたというだけのことであって、中身は必ずしも伝わっていないということになるのではないかと私は思うのです。

## 言語化のプロセスを重視してほしい

私はさっき、言葉でものを表すのは抽象化することだと申しましたけれども、抽象化、あるいは言語化するプロセスは、国語教育の中で非常に大事なものではないかと思います。対象を言語化するプロセスはいま国語教育の中でほとんど取り上げられていないようにみえますが、これからはその点にもっと力を入れていただきたいというのが私の強い願いです。言語化する対象にはいろいろなものがあります。例えば、この灰皿がどういうものであるかを口で人に伝えようとする、言語化が必要に

なるわけです。言葉でいえばこれはどういう灰皿であるか。そういう外界のものの形状や質と言語化するプロセスが一つの問題です。もう一つは、自分の心の中にあるものを人に伝える時の問題。灰皿のように外にあるものではなくて、自分の中にあるものは、すでにある程度、抽象化されているのだと思います。つまり、私は心理学のことはよく知りませんが、自分の頭の中にあることを言語化するのはわりあい易しいように思う。自分の外、外界にあるものを言葉で伝える方が難しいのではないかと考えます。これは間違っているかもしれませんが、たしかに感情を人に伝えるということになるとなかなか難しいようですが、それについては今までの国語教育でいい教育をしていると私は思うのです。外界のものについてのインフォメーションを人に伝えるのは、私のような仕事をしている人間にとっては非常に必要なことなのですが、今までの国語教育はその点に対する気配りが全くないような気がする。例えば、今朝からどんな天気だったということを人に伝えるには、どれだけのことを抽象的に取り出して、どんな言葉で人に伝えればよろしいか。また、これはどういうものかということ人を伝えるにはどういう心得がいるか。

国語の先生の森山さん(森山晴美 三田高校長)という方がさっきの座談会に来ておられて、森山さんにそういう話をしたら、私は子供にそういうことをやらせてみたことがあるということでした。例えば灰皿というような言葉を使わないで、言葉だけで、そこにある灰皿の形を説明させることをやってみたけれど、子供達は全然それについてくる能力がなかったというのです。つまり灰皿というものはわかっているのだけれど、人に見せて、どんなものかを説明してごらんというのと、子供達は四苦八苦するという。それは難しいことには違いないのですけれども、どうも私は、国語の力、言語表現の能力というのは、例えばそういうことでわかるものではないかと思う。

「これはどういうものか」ということを言葉で書いてごらんと言っても、子供は興味を示さないでしょう。そこで私が考えるのは、例えば自分の誕生日のパーティーに仲間の子供達を招待するとする。案内を書かなければならないわけです。自分のうちに来るにはどういうふうに来ればいいのかを言葉にして書いてみることになる。もちろん絵を使ってもいいのですけれども、そういう種類の訓練が、今の国語教育の中に 作文教育になるのですか 大変足りないと、私は自分の持っていた学生たちを見ていて感じました。そういう言語化のプロセスの教育、訓練をしていただきたいというのが、私の考えです。

そういう意味で、ものごとを言葉で表すときに、それが事実なのか、自分の考え、意見なのか、あるいは他の人の意見なのか、どれだけ人の考えがはいったことを伝えているのかを、はっきり区別することが大切です。それは『理科系の作文技術』という本その他にもさんざん書きましたから、ご存じの方も多いかと思いますが。事実か意見かに関する訓練、事実の記述と意見を読み分ける訓練・書き分ける訓練のことは『理科系の作文技術』に書きましたので、今、お話しいたしません。この頃、オウム真理教の記事を見ていると、どこまでが事実でどこまでが記者の意見、あるいは警察の意見なのかが、どうもわかりかねるところがある。あれはそういう意味で非常にいい例だと思うのです。どこまでが事実でどこまでが意見なのかをきちんと書き分ける、読む方はきちんと読み分ける、そういう訓練が是非必要です。証拠を挙げて裏付けすることができる事実と、事実の記述のように見えるけれども実は意見が混入している記述とを読み分ける、また書き分ける訓練が、これからの世の中ではますます必要になってくるだろうと思います。新しい国語の教育の中では十分に考えていただきたいことのひとつです。

## 日本語の成り立ちを教えてください

今までに三つのことを申しました。まず、もっと発信に重点をとということ。その次に、受信に関しては、言葉の世界の中で閉じてしまわずに、言葉が伝えようとしている中身を読みとる訓練をしていただきたいということ。それから第3番目に、言語化のプロセス、つまり自分が見たこと、あるいは自分が考えたことを言葉で表すというプロセス。言葉になる以前のものを言葉できちんと言うというプロセスを重視していただきたい、ということです。私は最初、今日は四つのことを申し上げると言いましたが、最後の一つは、義務教育段階ですぐには表に出てこない問題かと思いますが、国語教育の背景として、皆さんに是非考えていただきたい問題です。それは、さっき申しましたように、日本語の成り立ちのことです。日本語とはどういう成り立ちの言葉か。いろいろな説がありますね。

「いろいろな説がある」と言ったので思い出したから脱線しますが、私は教科書というものは間違ったことを書いてあってもいいと思うのです。私は昔からそう信じているので、文部省に高等学校の物理の教科書の検定を頼まれたときに、「これは間違っているけれども、生徒にものを考えさせるいい材料に使えるから、このままでかまわない」という評を書いたら、文部省の人はびっくりして、その翌年から教科書検定の仕事を持ってこなくなりました。おかげで私は大変助かりましたけれども、教科書とはそういうものだと私は思うのです。教科書は、生徒にものを考えさせるいい材料を提供すればいいので、必ずしも正しくなくてもかまわないと、私は信じています。

脱線しましたが、もとの話は 国語教育に日本語の成り立ちのことを取り入れて頂きたい、少なくとも国語教育の背景として日本語の成り立ちを考えに入れておいて頂きたいということでした。日本語の成り立ちにはいろいろな説があります。間違った説ももちろんあるでしょう。どれが正しいとは判定できないでしょう。けれども、それはかまわないと思うのです。それをきっかけにして生徒たちと議論ができればいいのです。

大和言葉はどこでどうできたのか、私は知りませんが、とにかく、おそらく最初に大和言葉という言葉があった。その後、中国の影響で漢字文化が入ってきた。それから、主として明治以後にヨーロッパ文化が入ってきて、一見、漢字文化のような形で日本語の中にとけ込んでいます。これは、柳父章さんによると(『翻訳語成立事情』岩波新書)、福沢諭吉その他の人が大変苦心してヨーロッパ語を漢語のかたちにしてくれたからそうなっているのです。「社会」、「個人」、「存在」などがその例です。こういう日本語の成り立ち、それから日本語と他の国の言葉とはシンタックスがどう違うのか というようなことを、国語教育の中でざっとでいいから教えていただきたい。これは高等学校段階でいいかと思います。これが私の希望することの第4です。

## 日本人と外国人との言語習慣の違いを取り上げてほしい

それからもう一つ、第5になってしまうかもしれませんが、さっき言いました日本語と他の言語とのシンタックスの違いに加えて、日本人と他の国の人々とのものの言い方の違い、言語習慣の違いに触れて頂きたい。日本語と英語は違うし、日本語とロシア語も違う。言語が違う以外に、これはおそらくもっと深く文化に根ざしたことで、日本人と英米人、ロシア人はものの言い方が違う、受け取り方が違う、考え方が違う。つまり私の流儀で言うと言語習慣が違う。言語習慣がどう違うのかを、少なくとも高等学校段階では、生徒にある程度、飲み込ませておいて頂きたいのです。これは私自身、何回か国際会議その他で他国の連中との議論の場を経験してみた上での結論です。言語習慣の違いの



ために、日本語としてはちゃんとした表現の話を英語なり、フランス語なりに、忠実に翻訳しているにも関わらず、それが相手には通じないという例をずいぶん私は見えています。言語習慣の違いを飲みこませておくことは、グローバルな時代には、国際協調のために是非必要だと思うので、これも国語教育の中で、ある程度教えておいてほしいと思うのです。

少し具体的な例をあげてお話しいたします。私のいた学校はわりあい帰国子女が多いのです。あるとき帰国子女の学級に先生が行って、11月でしょうか、外を見ると窓が開け放しになっていて大変寒い。先生は窓の方を見て、「寒いですね」と言ったのです。当然、誰かが立って閉めてくれるだろうと考えていたんですね。しかし、この帰国子女のクラスでは、みんなたいへん素直に「寒いです」「本当に寒いです」とは言うものの、誰も立って窓を閉めようとはしない。それは、彼らが今まで住んでいたブラジルやイギリスという世界では当然のことなので、窓を閉めてほしいければ窓を閉めてくれと言わなければ、行動には移らない。これは言語習慣の違いです。ですから、帰国子女の立場で言えば、言葉に対して正しい反応をしているわけなのだけれども、日本の中では、たいへん異質的に見える。そういうことがいろいろとあります。

もう一つの例は私の仕事に近い話ですけれども、私達はいろいろな技術的なデータをくれと、アメリカやドイツから頼まれることがあります。こちらは詳しく説明したつもりでいても、向こうは「まだ何かあるのだろう」「まだとことんまで説明してくれていないのだろう」といつまで経っても満足しない。こちらが、これはわかりきったことだと思って、日本人同士のコミュニケーションなら省いてしまうところまで書くことを、彼らは要求するのです。これも言語習慣の違いです。

そもそも私が言語技術教育に首を突っ込んだのは、若い連中の書く論文が必ずしも世界に通用しないということで困ったのがきっかけでした。一つはどれだけ言葉を尽くして、英語で言えばどれだけ **explicit** に、ものを書くかという問題です。今も申しましたが、我々同士のコミュニケーションならわかっているはずと思って言わないことまでも、彼らは **explicit** に言う習慣なのです。そういうことを心得ていないと、いろいろと狂いがでてくる。

だいたい日本人は、とことんまで明確にものを言うことは嫌いなのです。そうなったのは、日本が島国だからだと思います。海にかこまれて、他の言語をしゃべる人はめったに入ってこなかった。日本では、鹿児島から青森の間、ほとんど同じ言葉で意志疎通できます。実は私が小学生の頃には、青森の人の言うことは鹿児島ではなかなか通じなかったのですが、今は完全に通じる。昔でも、少なくとも文章に書けば通じた。そういう意味で、国じゅうどこでも一つの言葉でお互いに意思を疎通できる国は、世界にそうたくさんあるわけではありません。私は今、鹿児島と青森と言いましたが、北海道の一番北の稚内から沖縄までの距離は、だいたいドイツのハンブルクからイタリアの長靴の先のシチリア島までくらいあるのです。ヨーロッパではその間に少なくとも、10くらいの言語がある。小さい言語を入れればもっとある。日本では、同じ距離の間に一つしか言語がない。言語が共通ということは、背後にある文化もほぼ共通ということです。だから、日本人同士ならこっちの言うことを相手は必ずわかってくれる。おしまいまで言わなくても後は相手が察してくれるはず というのが、日本人のコミュニケーションの前提になっています。人の言うことは、不完全な表現でもこちらが察してやる、相手も自分の言うことを察してくれるはずだ と思ってコミュニケーションするのが日本人の流儀で、とことんまで言うのは、英語で言えば **elegant** でない、優美でない、美しくない。そういう美学が我々にはあるわけです。そういう点で日本人の言語習慣は、たいへん特徴があります。ある意味では偏っているのです。

学問の世界では、とことんまで明晰に言うことが必要で、論文ではそのことが要求されるわけです。

それをうっかりすると、日本の美学で途中で切ってしまう、途中まで言って後はやめてしまう。そのために日本人の書く論文は往々にして誤解される。論文もそうだし、国際会議で講演をしても、必ずしもこちらの意図通りに伝わらない。大きな理由は、言葉が下手だということももちろんあるけれども、日本的言語習慣にしたがって文章を構成するために誤解を招くことだというのが、私がそもそも言語技術に首を突っ込んだ理由なのです。これもやはり日本人のしゃべる言葉の問題ですから、それを国語教育の中に入れて頂きたい、バックグラウンドの一つとして考えていただきたい。

このことが問題なのは学問の世界にかぎりません。国際的な交渉になると、お互いの言語習慣が違うために、いかにちゃんとした通訳を入れてもやはり相手にこちらの意図が通じないということがあつる。日本の第一流といわれる通訳は、そういう点である意味でたいへん立派で、大臣がいい加減なことを言っても、ちゃんと言葉を補ってやっています。しかし、日本語と外国語と両方わかる人が聞いてみると、どうもちょっとおかしいなと思う。大臣の言ったことと通訳されたこととがぴったり同じではない。それが、国際交渉がうまく行かない一つの例であつて、この隙に乗ぜられることがしょつちゅうあります。

日本的な美学に立脚してこちらは相手の言うことを察する、相手はこちらの言うことを察してくれるだろうという前提に立って話をする日本的な表現と、とことんまで言葉に表して明晰にものを言うヨーロッパ流の表現と、どちらが広く世界に通用するか。私は、とことんまで明晰にというやりの方が、いわば世界の共通語なのだと思います。日本的な表現は一種の方言的な正確なものだと思うのです。日本人の間では、日本的な表現の方がぴったり来るし、美しくもあるし、いいのだけれど、これは世界の共通語ではないので、学問の世界では、あるいは国際交渉の世界では、どこまでも明晰にしゃべることを建て前としなければ、つまり共通語でしゃべらなければ、意図は通じません。こういうことを小学生に教えることが適当かどうかはわかりません。けれども、国語教育の計画を立てる側では、そういうことをちゃんと考えて教育のプランをたてていただきたいと私は考えます。

どこまでもexplicitに明晰にというヨーロッパ流の考えと、察する、察してもらふ日本流の美学と、二つを両立させてほしいというのが私の願いなのです。野球にスイッチヒッターという言葉があります。右でも打てるし、左でも打てる人。右でも左でも打てるように若い人を育てるのが理想だと私は思うのです。スイッチヒッターは世の中にたくさんいるわけではないので、スイッチヒッターを育てることはたいへん難しいのですが、そのための教育法を真剣に考えていただきたい。今、日本の大部分の地方の人は、自分の方言、美しい表現を忘れつつある、共通語になりつつある。どこまでもexplicitに明晰にということ強く主張して、そういう世界の共通語的なものの言い方に全部の日本人が切り替わってしまつては困る とは私も思うのですが、差しあたりのところはスイッチヒッターの養成に乗り出すほかないだろうと思います。ちょうどお約束の1時間ですので、この辺で終わります。

## 第2節 木下是雄先生との話し合い

### 生活の場での効果的な言葉の運用

甲斐ム ありがとうございます。それではこれから1時間ほど、できるだけ木下先生のお考えを頂きたいと思つておりますので、皆さんの方からご質問等がありましたらどうぞ。

木下 私の考えに同化されなくてもいいのです。私の考えに触発されて何か考えて下さればよろしいのです。

寺井 言語技術の教育で、もっと発信をというところで先生がお使いになった傘の例でございますけれども、子供が「先生、傘」としか言えないのが、いったい何が問題なのかと言うと、困ったという自分の問題状況を把握できていなかったり、あるいはそういう問題状況に応じてどうことがなされるべきかということがわかっていなかったりという、いろいろな問題があって、それが必ずしも、言語技術が備わっていないから、「先生、傘」としか言えないとはならないのではないかと。もっと場に即して、場の判断に応じた言葉を、あるいは場に依って自分がどうすべきかということがわかった上での言葉の使い方という気がするのですけれども。

木下 それが言語技術なのではないですか？

寺井 そうすると、国語教育でも、言語技術という議論はたくさん行われていますけれども。先生がおっしゃったのは、非常に、生きる場という言葉をわざと得ない生活の場において、いかに効果的に言葉を運用していくかということが言語技術と、受け取っていいのですか？

木下 私はそう理解しております。学習院言語技術の会で定義している言語技術はそういうことなのです。いわゆるテクニクとは違うのです。

寺井 そうすると、そのことに関わってくると、先ほど受信のことで、教科書だけではどうしても教育ができないという文脈があったと思うのですが、それは結局、今の傘の議論などと結びついていくわけですか？

木下 傘の議論とも結びつきます。教科書は、言語化されたものでしょう。教科書と、読み手とは、言語を通じてつながるだけなのです。私が言いたいのは、言葉を言いかえているだけでは言葉で伝えようとしているもの、言葉の外にあるものがうまく伝えられないのではないかとということなのです。一旦言語化されてしまったものを、他の言語に、あるいは子供にわかる易しい言葉に言い替えることは、今の学校教育でもできるようになります。しかし、その中身、つまり人が伝えようとしているものごとをしっかりと受けとるような聞き方をしてくれなければ困る、そういう読み方をしてくれなければ困る。

寺井 そうすると、教科書の議論に限定してきますと、今の国語科の教科書を先生はどのようにお考えになっていますか？

木下 最初にお断りしたように、私は今の国語教育の教科書をそんなに読んだことがないのです。高等学校の教科書は、私の書いたものを載せるという関係もあるのでしょうか、ときどきくれますから、それはちらちら見ていますけれども。実は小学校段階にはそういう本をくれるところはないし、買おうとしても難しいですね。「先祖の使った教科書」しか私の頭の中にはないわけです。

しかし、私が問題にしているのはむしろ教科書の読み方、読ませ方なのですが.....。

## 漢字の中のヨーロッパ文化

徐敏民 先ほどのお話の中で、とても興味を感じるのは、日本語の言葉の背景にある文化をこれから生徒に教えなければいけないということなのですけれども、その大和言葉の範囲はどの範囲でありますでしょうかということ。もう一つは、明治以降は、明治のヨーロッパの、科学や医学のいろいろな文化的な面で日本に入って、それから日本からたくさんの漢字を作りまして、という話ですけれども、私もその辺について、論文を書いたことがあります。実際中国では、漢字は全て中国人が

作ったという思い違ったところがあります。調べてみると、今現在使っている漢字はたくさん、留学生の逆輸入です。明治の時に1万人以上の留学生が日本にまいりまして、それから逆輸入していますけれども、普通の中国人は知らないのです。その時、日本の学者達が漢字を作ったのです。それが先ほどおっしゃった「これは中国の文化ではない、ヨーロッパの文化だ」ということになります。それはそれで言えるのでしょうか。つまりそれはヨーロッパの技術は入ったのですけれども、作った漢字は漢字なりの良さ、一目瞭然の、意味も考えて作っているかと思しますので、それは漢字にヨーロッパ文化ではなくて、中国の文化を日本で改革したのではないかと思います。いかがでしょうか。

木下　私は国語学者ではないのできわめて単純で、私が大和言葉というのは、逆立ちしても漢字で書けない言葉、つまり普通はひらがなで書く言葉　というぐらいの大ざっぱな意味です。古くからある日本の言葉という意味もありますね。ひらがなで書く言葉というと、最近生まれた言葉も中に入ってしまうから。大和言葉とは何かと言われると、私はちゃんと考えたことがないというのが本当のところですよ。

それから、ヨーロッパの言葉を漢語化したと私が言ったのは、例えば「個人」というのは、あれは「個」という言葉も漢字も昔からあるわけでしょう。「人」もそうですね。そういう種類のもの。他に例をあげれば「自由」あるいは「民主」。「自」にしても「由」にしても、あれは別に日本人が作った漢字ではないだろうと思うのですが、どうですか？

徐　例えば革命の場合は、本来は、カクテンメイといいます。カクテンメイは、日本語では革命といいます。

木下　それは「漢字」の問題でしょうか？

徐　明治以降は、漢字を元にして、ヨーロッパの科学技術的な言葉を作った新造語なのです。

木下　普通の日本人は、いわゆる漢字で書いてあれば、これは漢語だと思う人が大部分なのです。だから例えば自由というのでも、普通の漢語と同列に考えている。今「普通の漢語」と言ったのは、文化論的に言えば昔の中国の影響を受けた言葉のことです。すべての漢語がそうでない。一見漢語だけれども、その概念自体がもともと中国にあった概念ではないというものがあるわけでしょう、ヨーロッパ生まれの概念。例えば個人もそうだし、自由もそうだし。元々中国にも自由という言葉があったかもしれないけれども、少なくともliberty という意味の自由ではないでしょう。日本でいっている自由はliberty という意味なのです。あるいはfreedom という。自由という言葉が、昔から中国にあったかどうか正確には知りませんが、おそらくそうではないのではないかと、私は想像しますが……。

## 事象の表現と国語科の枠の改造

安　例えばイギリスの国語教育などでは、language across the curriculumとあって、全てのカリキュラムを通しての言語教育という発想があります。むしろ事物を言語化する。先生のおっしゃった部分だと、例えば理科や社会だと、理科的事象、社会的物事があって、生活科なら生活の事物が教材としてあって、それを言語化するので材料としてしやすいと思うのですが、この場合、事物化する外界にあるものが、国語科特有のものが、果たしてどういうものを事物化していく、どういう事物を表現していくのが国語科の場合に有効であるか。むしろ理科や社会などで先生がおっしゃったようなことは力を入れ易いのではないかと、という気がしたのですがその辺はいかがでしょう

か？

木下 私は、国語科が他の科と切り放して独立していることが、必ずしも必要ではないという考えなのです。私たちが学習院で作った言語技術の教科書は、中に算数の問題がでてきて、どうやってそれを説明するかを取り上げます。例えば植木算。木が10本ある。それを2メートルおきに植えていくと、全体で何メートルになるか。私達の言語技術の教科書では、そういうものをどう考えるかを説明するのは、言語技術の問題だと考えています。私たちの立場でいうと、そういうもの全てを表すために日本語が必要なことから、国語科特有の対象などというものは存在しない。国語科特有のものと言ったら、古典はそうでしょう、おそらく。けれど、現代のことに限っては、国語科特有のという考え方は実は私の中にはないのです。イギリスのことはよく知りませんが、彼らの考えはそれにやや近いのかもしれませんが。だから事実、私達の作った言語技術の教科書は、化学の先生が使ったり、社会の先生が使ったりしているようです。

安 その話をお聞きすると、やはり、我々の国語科という固定した概念をもう一度打ち崩して、特に国語科で弱いとおっしゃられた部分に関しては、枠にはまりすぎているがためにできなくなっているのではないかという感想を持ちました。

木下 そうではないかと思います。

## 生活・学問の道具としての日本語の力を

甲斐ム 元に大学にいたときに、教養部の改組がありまして、全学をあげて英語の授業はもっと増やさなければいけないと言ったのです。ところが、理科系の先生は声を大にして叫んだわけですが、釘を差したのです。「英語の授業を増やそう、ただし今の英語の先生の授業はダメだ、我々がボランティアで持ちたい。」と言った。そのことと関連があるのでしょうか。つまり英語の先生がやったらシェイクスピアをされてしまう。自分達はシェイクスピアはいらない、論文を書いたり読んだりする英語力がほしい。それから発表能力がほしい。先生がおっしゃる国語の結晶の能力とは、どちらですか？ それから日本の言語文化、日本語の文化そのものもいるということですか？

木下 日本の言語文化はもちろん教えて頂きたい。しかしその前にまず生活の道具(tool)として、また学問の道具としての日本語の使い方を教えて頂きたいと考えます。

## 国語の辞書への要望

上谷 一つご質問をお願いしたいのです。日本の場合、教科書を使った言葉の授業になりますと、言葉の上での言い替えが中心になっているというお話がありました。定義という言葉がその時に思い当たるのですけれども。日本の場合ですと、国語の辞書は、愛とは好きということ、好きと引いたらまた愛すること等、言い替えるような感じがあります。難しい言葉を引こうとすると、その中ででてきた言葉がわからないとまた辞書を引いてという具合に、言葉の言い替えがやはりあるのかと、先生のお話を伺って思ったのです。そういう場合、先生でしたら例えば国語の辞典について何かご要望がおりかということでお伺いしました。それは、定義や言い替えではなくて、どちらかと言えば発信する側・受け取る側がその中身を掴まえるということになりますと、ただ言い替えるのではなくて、灰皿で言えば、用途とその実際の形状という二つの側面があれば、その両方を兼ね備えたかたちにした方がいいとなるのか、形状はともかく、どういう用途に使われるものかという

ことをちゃんと説明した方がいいとなるのか、そういったあたりのお考えがあればお願いします。

木下 灰皿は難しいです。灰皿は用途さえしっかりしていればいいのではないですか。普通はこういう例が多いと、つけ加えてもいいでしょうけれど。

今おっしゃったように内容を説明しているという点では英英の字引の大きいものには大変良くできているものがあると思います。私が好きなのは、ランダムハウス(Random House Dictionary of the English Language) という辞書です。物理の言葉でもきちんと説明してあります。

上谷 そういった辞書のようなかたちになることが望ましいのですか？

木下 はい、そう思います、現代語の字引というものはそうでなければならないのではないのでしょうか。

上谷 フランスなどでは、私はあまり知らないことなのですが、よく作文の授業はある物事を定義するということになる。ですから、あることをいうためにはこの一つの言い方しかないというかたちで、作文の教育をやると聞いたことがあるのですけれども。先ほど先生が、言語技術というときに、アメリカとフランスをお挙げになりました。そのフランスについて、何か先生の方で知っていることを伺えたらと思います。

木下 私のフランス人との雑談で入ってきた知識だけですから、人に言うようなことではありません。

## 言語技術は人間関係全体まで含み持つ

甲斐ユ 質問になりますけれども、明晰さについては、絶対的な基準はないと思うのです。ある場面における明晰さが常に求められている。その明晰さとは、話し合っている相手との人間関係や、相手が欲しているものや、自分の考えているねらいや、そういうものの相対関係でのみ計られるとするならば、言語技術は言葉の問題を含みながらも人間関係全体まで含み持つということになるでしょうか？

木下 コミュニケーションの道具(tool)は言葉だけではありませんね。私が言語技術と言ったのは、言葉を通じてコミュニケーションするときに必要な心得、あるいはその訓練という意味なのですが、それが相手によるということは当然だと思います。全てものを説明するときには、相手はどういう人かを考えて初めて説明の方法が成り立つので、相手によって違うというのは言語技術の立場で考えれば当然です。早い話が、大学生に対して非常に明快な説明というのは、小学生には全然わかりにくいでしょう。

甲斐ユ 相手の持っている知識量や立場を忖度する力も、その中には必要だということですか？

木下 それは是非必要なのではないですか。例えばパソコンとか、ワープロとかそういうもののマニュアルを書くときに、相手が何も知らないとすると、ものすごい厚さのものになるでしょう。それでは困るので、やはり相手のことをまず考えなければいけないのではないですか。説明するためには、こちらが説明すべきものを十分理解していることが第一前提であって、第二に、相手はどういう人だということをごちゃごちゃと忖度する、見分ける能力がなければ説明ができないでしょう。大学の先生は大部分そういう点でダメなのだと思うのですが。

## 「寒いね」と言われたら帰国子女は？

柳沢 先ほど、帰国子女の生徒のところ先生が来て、という会話の例を出されていました。実は私は木下先生の言語関係の本はほとんど読ませていただいていたので、かなり共鳴を得ている中で、あえて質問をさせていただきたいのですけれど。例えば先生という立場と生徒という立場が一つの教室の中において、「寒いね」と言ったときに、これが自分の上司と自分という場合だったら、「寒いですね、閉めましょうか」と言うと思うのです。そこに先生と生徒というpower relationがあるものだから、その先生にとってみると、「寒いね」と言ったら生徒は閉めるものだという、言語が持つ機能的な意味以外に、「先生なのだからわざわざ俺が閉めるよりは生徒が閉めるものだ」みたいなもの、その先生がというわけではなく可能性としてですけど、そういうある種の、先ほど話題になりました非言語的な思惑、やりとりがあると思うのです。そういうものを例えば小中高という発達段階の中で、言語プラス、非言語的なことなのですけれども、その先生の学習院の例でもかまいません、あるいは先生ご自身の考えでもかまわないのですが、どのように取り扱うものだろうとお考えでしょうか？

木下 帰国子女の場合には、相手が先生だからということは、向こうはほとんど考えないでしょうね。

柳沢 あるものに関しては、もしかすると先生と思うかもしれないけれど、それ以外のことに関しては単なる一対一だと思う場合が往々にしてあります。

木下 帰国子女の場合はまずだいたい一対一と思っているでしょう。例えば数学の話になると先生に一目置くでしょうけれど。

柳沢 その場合に日本では、これはどういうかたちで伝えるか、あるいは説明するのか、あるいは日本語のトレーニングの中でやっていくのかわかりませんが、そういうところまで、触れていくのですか？

木下 日本語のトレーニングとしては、相手によってもものの言い方が違うことが現実なので、それはやはり、ある程度教えなければいけないことなのでしょう。

柳沢 ただ日本の国語教育ですと、ある種の社会環境が日本語だということがあるものだから、個人の受けとめ方にまかせているところがあります。明確にきちんとやらない。ところが、外国人、帰国生を含めると、その辺は出していかなければならないところがあると思うのです。ただそれは、大人の場合はある程度、向こうにも受容度と拒絶度が判断としてありますけれども、小中高の場合に難しいのではないですか？

木下 難しいかもしれませんが、やはり無視してはいけないのではないですか。ぼくは敬語や謙遜語の議論には入りたくないのだけれど、そういう種類のことを教えるときには、どうしても必要でしょう。

柳沢 それはそうなのですが。逆に言えば、言語表現的な文献に逃げる、あるいは表現形式に逃げることはあるのですけれども、その辺までやるといやだということがあります。

木下 それはいやでしょう。いやだという気持ちはわかります。

柳沢 多分こちら側の価値観が出るのだと思います、どこに重きをおいているかという。それを出すことは結構、教師は嫌がるのではないかと思います。

木下 さっきの「寒いね」という例は、例えばうちの中で、家長のぼくではなくて例えば娘が「寒いね」と言ったら、そばにいた人は閉めようとわが家では反応しますけれども。

## 客観的な評価と教科書の枠

**足立** 私は日本語教育の方なので、さっき木下先生がおっしゃった四つの点は、日本語教育自身がアメリカから入ってきたものが多いということもありまして、目指しているのですけれども。特に大学、留学生に対して私は教えているのですけれども、その場合大学の講義を聴いてノートを取って、自分達の意見を言ってきちんとした論文を書くということが大学における日本語教育の役割ですので、やっているのですが。そのskill技術を考えた場合に、評価という意味で私自身、揺れている部分が多くて、客観的な評価をどのように出していけばよいのか。実際、国語教育の中でも、相対評価で出して行かなければならない、という現状の枠組みがあると思いますので、その中で教師が評価をしていくのに、例えば明晰なという表現が、ある人間にとっては、ある教師にとっては、この子は良くできていると思っても、ある教師にとっては、その教師のトレーニングの背景もあると思うのですが、そういうものによって揺れるのではないかと思います、私自身非常に困っている、これが一つ目の質問です。もう一つ、教科書からはみ出るといのは、実際、日本語教育はstrategy問題解決をするために、どういことをしていけばいいかということで、困ったときにはこういう表現で、そしてこういう非言語的な態度も直しながらということも、みんなで話し合いながら、どうやっていけばいいか、それから逆に外国から来た人は、自分達の国ではどういう表現を使ってやっていくのかということと一緒に、その時は日本人も混じって、教えてもらうというかたちで進めているのです。そういう学校教育の場合どうしても枠組みがあるので、教科書からはみ出た部分というの、どのようにフォローして小学校や中学校の教育の中で折りこんでいくべきなのか。私自身、大学の留学生教育にかかわっているときに、そこがわからないと思ってしまうときがあるのですけれども。

**木下** はい。私の考えとしては、教科書の枠に縛られるということは大学の場合にはほとんど必要ないと思います。小学校や中学校の場合でも、先生がきちんとした先生であるならば、教科書の枠に縛られる必要はないと思うのです。大学の場合には、少なくとも自分の教えることに関しては、その人はかなりきちんとした人であるはずですね。そうだとすれば、教科書はtoolとして便宜上使用だけであって、いつでも捨てていいものだ、私自身は思っていました。

**足立** 大学内ではそういうふうに私自身も捉えております。ただ、他の日本語の先生方に聞いたら、非常にばらつきがある。特に大学の方から指定のあるものもありますし。小学校や中学校の枠組みの中で教科書を取り払うのが理想だと私自身も考えているのですけれど、ではそれが可能なのか、可能でないのか。

**木下** 現実には可能でないと思います。というのは、小学校の先生に日本語の教育、あるいは国語の教育を全面的にまかせられる人がそんなにいると思わないから。そういう現実に照らしての考えです。

評価については、評価が人によって違うのは、しょうがないのだと思うのです。つまり計算問題ならばそれは答えがはっきりしているからいいけれども、そうでないものの評価は、全て人によって違うのが当然ではないでしょうか。例えば卒業論文の評価は人によって非常に違います。それに対する唯一の対策は、何人かの人が読んで、「多くの人はこう評価する」と学生に告げる。それ以上のことはできないのではないのでしょうか。義務教育の中でもある程度の揺れを認めることは必要だと思います。



## 言語技術の具体的な現れ

寺井 先ほど甲斐先生がご質問になったときも、人間関係、相手に応じて言語運用をできるのが言語技術だとおっしゃったと思うのです。実際に教科書も使わない方が望ましいという状況がある。ところが一方で、テクニックだけのものではないと先生はおっしゃったと思うのですけれども、現実問題の学校の小中学校の国語の時間をみると、結局それだけの表現や言語技術を必要とする場というものが、必ずしも状況的に設定できない。そうすると、技術のある程度テクニックとして教えていく、技術という言葉から教えていかなければいけないという方向性もでて、そういう実際の指導等も行われていると思うのですけれども、そのような実際の切実な状況がどの程度必要なのか、逆に言うとテクニックだけで果たして教えられるかということに関して。

木下 そのテクニックというのがよくわからないのですが、どういうことですか？

寺井 例えば、作文を書くときに順番に気をつけるということで、順序を表す接続詞を覚えていくことだけを教えていくことを、「教材の教科書の文章の構成がそうなっているから、それは物事を説明するときには大切な技術だから、それを使って作文を書きましょう」それで作文を書かせたというようなことが行われている。本当はそれは必ずしも技術を教えるために教えているわけで、結局、必然的な対象に根ざした順番性や選択が行われているわけではないと思うのです。ですから、どこまでが技術として取り立てるのか、状況から離すことができるのかということに関して、いかがでしょうか？

木下 私がそういうことをもし教えるとすれば、「原則としてはこうする方が読む人にはわかりいいのだ」というところで切ってしまいます。「原則としては」で、例外はいくらでもあると言う。義務教育段階では、それではいけないのでしょうか。いいではありませんか。私はつまり、小学生だって画一的に同じ答えが出るようなことばかりをさせるべきではないと思います。が……。

## Language artsの訳語としての「言語技術」

寺井 技術という言葉で、大切だということでそういう指導がずいぶんあるのです。先生のご提案は非常に私達にはわかりやすいのですけれども、言語技術が、また一方でそのような文脈も抱えているものですから、そのあいだの差をどの程度にすればよいのでしょうか？

木下 言語技術という言葉をもう少し別の言葉にしておけばよかったのですけれども、最初に私が言い出したときには、ただLanguage artsを直訳したわけです。アメリカにおけるLanguage artsは、私がさっきから言っているようなことだと思うのですけれどもも……。たまたま後から言語技術という言葉をはかの意味で使いだした人もいるし、実はもっと前からおそらく言語技術という言葉はあったのですね。あったことを知らなかったのはこちらの落ち度なのですけれども、もう少し別な言葉にすれば良かった。ですから、言語技術という言葉には少しもこだわらないのですが、今までに既に、私が首を突っ込んでから20年たっているのです、世の中にもある程度、知れ渡ってしまっているところもあるし……。うまい言葉があれば今から取り替えてもいいのですけれど。

柳沢 artという単語は訳しにくいです。私が出た大学の学部がliberal artなのですけれども、これを日本では教養学部と訳しているのです。教養を教える学部、となかなか難しい。ただ、かなり広範囲に向こうはartを使います。

甲斐 日本は「技術」という言葉が、一方で非常に狭くて否定的で形式的だという意味があります。

先生のおっしゃる真意はみんなわかっているけれども、技術という用語にしてしまうとおかしくなる。

木下 2年ぐらい前ですか、通産省の関係で地球産業文化研究所という、何でもできるような欲張った名前の研究所がありますが、そこでシンポジウムをやったのです。そのとき「言語技術という技術の問題ではない」とかみついてきたのは、鶴見和子さんです。私が説明したら「そういうことなのですか」と言いましたけれど……。だから大変誤解されやすい言葉だということは、その時、骨身にしみてわかりました。

甲斐ム あのときは私も聞いていたのですけれども、鶴見さんの言われたことが先生の言われる技術だと思ったのです。

### 「教科書で」教えるのか、「教科書を」教えるのか？

柳沢 初・中等の教科書を見ていますと文学作品が多いのは事実なのですが、コラムのようなどころに、事実と意見文のことやいろいろな面白いことに触れているのです。あれは、「教科書で」教えることをしなくて、「教科書を」教えるになってしまっているからつまらないのか、という気がしているのですけれども。ただそれは例えば今みたいに教科書が、別な人が作って、ある基準に基づいてある規範の中で教授していきなさいという中では、なかなか難しいことではないか、やはり「教科書を」になってしまうのではないかという気がするのですが、いかがですか？

木下 それは、そういう教育のシステムを作ったのがいけないということでしょうか？

柳沢 余程強い人間ですと、その中でも「教科書で」となるのかもしれないのですけれども、やはり毎年、教科書が来るとなると。

木下 今日はその話をしなかったけれど、日本の教育は、だいたい受信型です。受信型の教育は、よその国の文化を取り入れるという段階では非常に効率的なのです。日本のサイエンス、あるいは日本のテクノロジーが現在の段階に達したのは、受信型で勉強したせいだと僕は信じているのです。私の先生達の先生達の頃まではまさにそうなのです。私の先生の頃はそれがちょうど切り替わりの時期で、私の頃には、だいたい受信型を抜け出しつつあったと思うのです。でもやはり学生を教えてみると、アメリカの学生を教えるのとは全然違います。どうしても向こうは発信してこない……。アメリカの大学の教室は、だいたい先生がしゃべっている時間より学生のしゃべっている時間の方が多い。学生が文句を言っている時間の方が多い。学生が質問をしたり文句を言ったり、自分の勝手な意見を言ったりしている時間の方が多い、発信型とはつまりそういうことだと思ふのです。そういう意味の発信型の教育は、日本ではやろうと思ってもなかなかできない。少なくとも大学に来たときには学生はすでにそういう発信能力を失っているのが難しいです。

柳沢 今みたいな、いわゆる教室形態をとっている場合、ある種の言語教育はできると思ふのです、例えば知識の移行など。実際に先ほど先生が言われた言語技術は運用のことが中心になると思ふのですけれども、運用になったときにはやはり教室内でやれることには限界がある。一つの例ですけれども、他の教科、例えば物理と化学と生物とだと、程度の副詞や、条件や前提を表す「たら、なら、ば」や「とき、ばあい」というのは、数学とでは、かなり使われ方、頻度が違う。そうすると、先ほど先生は他の教科の中という例を挙げられたと思ふのですが、そういう連携や、後は外に出ていくこと、あるいは外の人の中に入れることをやらないと、今の教室の中では、知識の移行は別としまして用面となると、なかなか難しいのではないかと思ふのですけれども、その辺はいかがです

か？

木下 おっしゃる通りだと思います。今の教室ではこう机が並んでいるのを、こうしますとかなり変わります。つまりクラスの半分と他の半分とが向かい合って、イギリスの議会のような形にする。学習院で一度やったことがあります。あるクラスでは今でもやっていると思います。かなり生徒同士の議論が盛んになって、面白いです。

甲斐△ 学習院の小学校は、教科書はどういう扱いですか？ 実はこの前、文部省の初中局の審議官に来ていただいたのですが、教科書から離れよと言われたのです。「教科書で」も「教科書を」もいらない「教科書も使う」という授業が望ましいのだと言われました。

木下 それは文部省全体の方針なのですか？ そうだとすれば大変結構なのですが、**も……**。ほんとうにそれをやるためには、やはり先生を作る学校のやり方を変えないとできないかと思います。

### 教員養成の問題

甲斐△ それも言っておられました。私は先生に教員養成の問題をお伺いしたいと思うのですが。

木下 教員養成の問題は実は考えたことがありません。しかし、実際問題として、先生を作り替えなければダメだと思うのは、ちょっと質問からはずれてしまいましたが、私は学習院で言語技術の教科書を作ってみまして、科学研究費の「言語の標準化」という特定研究の会議でその話をしたわけです。そうしたら方々から分けてほしいという申し出がありまして、最初のうちは気前良く差し上げていたのです。ところが先生達がそれを使って授業をしようとする、もちろんいろいろと抵抗があります。「校長がダメと言う」そのほかいろいろあるのですが、先生自身が教科書に載せてある問題に解答を出せないということが最大の問題でした。他のことはある程度何とかできるけれど、それは何ともならないので、つまり先生の教育からやり直さなければダメだとわかったわけです。だから教科書を作り始めてからそろそろ**20年**になってもあまり軌道に乗らないのです。先生が二代くらいつながらないと、本物にはならないだろうと思います。そういう意味で教育を変えるのは大変なことです。文部省が反対するというのは、第一の問題ではないので、やはり小学校の先生、中学校の先生に、ちゃんとこういうことを教えてくれと言うためには、その先生自身を教育しなければダメなのだとしたことなんですね。悲しいことですが、これが現実なのだと言、私はそう思っています。

甲斐△ 先ほど小学校の国語の授業は、もちろん文学の授業も必要だけれども、理科や社会科の基礎に働く言語能力があるとおっしゃったのですが、そういう力を教師がつけるための大学の講義が今ないわけです。そこをしていくためには、教員養成という制度をどう考えていくといいのかということだと思っております。

木下 おっしゃるとおりだと思いますが、ぼくはそういうことはあまり考えたことがないので、即答はできません。考える意欲はあります。

### 明晰な話し方と「察する」「察してもらう」式の話し方を備える

徐 最後の、日本語、つまり察する文化というところで、日本の文化を維持しながら、国際社会にも通用する学生をこれから両立させたいという考えをおっしゃいましたけれども、とても素晴らしいと思います。もう少し具体的にどうしたらいいのか、今の現場では外国人子女、帰国子女もい

ますし、先生のお考えをお伺いしたいと思います。

**木下** 教室の中では、公的な面では、やはり世界共通に通じる話し方、明晰に、**explicit**にという話し方をすべきだと思うのです。けれども一方において、先生とのつき合いにもプライベートのつき合いもあるし、家族とのつき合いもありますね。そういうつき合いでは今まで流の「察する」察してもらおう」式は、なくそうと思っても簡単にはなくならないでしょう。ですから、スイッチヒッターを育てることにってはばくは割合楽観的なのです。しかしやがては明晰に、言葉をつくしてという共通語になっていってしまうのだと思う。あまり好ましくないことだけれど、何十年かうちにはそうなってしまうでしょう。今さしあたりは、共通語と地方語との両立にならざるをえないし、それを目標にして行くべきだと思うのです。やがては共通語化していくことは、どうしてもではないかと、つっこんで聞かれればそう答えるほかない。

### ディベートを教室で行う意義は？

**甲斐ユ** 言語技術の教科書のテキストの中学校編か高校編のどこかに、ディベートが取り上げられている。そこでは制服の是非を巡ってのディベートが展開されていたように記憶するのですが、あの場合、ディベートでどちらが勝ったかといって制服が変わることはないと思うのです。あそこでの議論はテクニクを競う一種のゲームであって、論じられた世界は仮想されたフィクションの世界ですから、そのような見方でいえば、必ずしも議論が現実の世界と繋がっているとは言えない。そのようなディベートであっても実際に教室でやる意味があるとしたら、それは論駁の技術や、主張の技術や、そういうものを学びとるためののみ必要であると理解しておけばいいのでしょうか？

**木下** 私はそう思います。ディベートは、少なくともフランスの学校では必修科目でしょう。アメリカの学校でも、かなり必修にしている高等学校があるようです。ディベートのテクニクを知らないこと、少なくともディベートの場数を踏んでいないことが、日本の外交官の弱みなのです。ほかの国でも実益に直接つながるようなディベートを学校でやっているはずはないので、全部フィクションの問題だと思います。しかしディベートをしたということが、ディベートの経験を積んでいるということが、彼らの強みだと思うのです。彼らと実際にディベートをしてみますと、反応の早さが違うのです。それは、こちらは英語なりフランス語なりで無理して考えているという弱みもちろんありますけれども、それ以外に、彼らはイエスカノーかの判断が速いのですね。だいたい普段しゃべっているときにも、彼らの流儀ではイエスカノーかを最初に言うわけですが、そのことがディベートの場合には大変な影響を持つ。ここでゴーサインを出すかストップサインを出すかという判断が実に速い。間違っていると平気で後で直すのだけれど。

**甲斐ム** ディベートですけど、私がいま一番困っているのが今の問題に関係するのです。制服の是非の時に、本心は制服がいやだと思っているけれども、制服を守れという立場をとったということがあります。本心と違う立場で言う。つまり口先といいますか、なかなか日本人はそこへ行けないのです。

**木下** 実際はそういう訓練を受けたか受けないかということで、ディベートの勝負での強さが違うのです。それは事実なのですが、他の国でも、実際の社会で本格的なディベートをする立場になる人が、どれくらいいるかということを考えると、本心と違う立場で議論をさせる訓練が必要かどうかはちょっと疑問ですね。

**甲斐ム** 多分ここへ来ている者は小・中学校へ指導者として話し言葉の指導に行っていると思うので

す。ディベートの時に今の問いは聞かれるわけです。私は、アメリカや外国では自分の考えていること、思っていることと違う立場もとっているのだということまで言うのですけれど、日本ではという将来像がなかなか出しにくいのです。

**木下** それは例えば外交官を養成する学科というものがもしあったとしたら、そこでは必ずやると思います。自然科学の場合にはあまり必要がない。論理透明ですから、逆の立場になったからどうということはすぐ見えてしまう。人間が絡んでくる外交や経済では問題でしょう。

**甲斐ム** 普通の小学校では信じている立場をとる、これでよろしいわけですね？

### 『理科系の作文技術』の意味するもの

**安** 例えば教室の中に、実際の生活を言語化していくことを取り入れていくことは必要であると思うのです。また、先生も実態検討の言語化をおっしゃるかと思うのですが、例えば日本の教育史で、教室の中に生徒達の生の現実を取り込んできた歴史があると思うのです。そういうつづり方などにおける作文の歴史というものに対して、先生に何かお考えがあったら聞かせていただきたいのですが。

**木下** 私の考えではありませんが、明治時代のつづり方、あるいは作文はもっと現実的だったと思います。いわゆるつづり方が生まれ、文学に直結したのは鈴木三重吉以来ではないのですか。私は『赤い鳥』の時代、つまり鈴木三重吉の時代の影響を受けていますから、私が昔書いたつづり方は、たぶん文学的です。文学的というのは、明治の時代とは違って、必ずしも美文調をという意味ではなくて、本当の気持ちをそのまま書けということでした。その明治の時代には、実際、観察した事実をそのまま書けとか、つまり今私が必要な教育だと思っていることを、明治の時代にかえてやっているのです。それはおそらく外国、欧米の影響だと思います。つづり方、作文が文学教育になったのは、大正以来、極端に言えば鈴木三重吉以来だと思います。そういう教育を受けて、私は良かったと思うけれど、それでいやになったというものがたくさんいるわけです。

**寺井** 先生のご本に、『理科系の作文技術』という本があって、理科系で特に重視する言語運用の仕方についてのご本だと思うのです。そうすると、社会科学系の言語技術、あるいは人文科学系の言語技術、あるいは芸術系の言語技術、体育で使う言語技術というのは、特別に成り立つのかどうかということ、先ほどのお話だと国語で限らずとも、他の教科において言葉の力がつくという発想がありますから、他の教科での特有性もふまえての、指導のあり方を考えていくことが成り立つと思うのですが、本当にあちこちの方での言語技術はあるとお考えでしょうか？

**木下** あの本は、もともと『自然』という雑誌に連載していたものをまとめたのですが、どういう題にしようか、だいぶ考えました。『理科系の作文技術』という題をつけたのは、一つには皮肉のつもりだったのです。けれど作文技術としての中身は、文科系でも全く同じだと思います。全くではないです。文学作品の書き方は全く別ですし、また論文の書き方と言っても、文献引用の仕方など、細かい点は違います。しかし、論文、レポートの作文技術としては理科も文科も本質的な差はないのです。事実あの本を出したときに、文科系の先生が、これは自分達の方でも役に立つからと使ってくれた方がたくさんあるのです。けれどもそういう人達も例文がわからないと言うのですね。その点に関してはこれは理科系向きの本で、超伝導の話などが出てくるのだから、わからないのは当然です。

そこで、例文だけ取り替えて、中身は本質的には同じことを書いてくれないかと言われて出した

のが、筑摩の本なのです。筑摩の『レポートの組み立て方』は、作文技術の本筋では同じことが書いてあるのですが、例題が全部文科向きのものを使っています。

寺井　そうすると、ある程度、言語運用とは、分野にかかわらず明晰さを持ってすべきだということですか？

木下　私はそう思います。自然科学、社会科学、あるいは経済などという世界ではそうだと思います。そうでない、人間の気持ちに主眼がある文章だと話は変わります。あれはそういう意味では客観世界に対する文章技術なのです。

甲斐△ 今日の先生のお話を伺ったときに、最初に次の四つがあると言って、四つのことの概略を、その後でまた一からということでお話くださって、これはやはり言語技術の構成でしょうか？

柳沢　前に、留学生の作文が、大学の話ですけれども、ワープロで打たれているものですから、見る方は誰が打ったかわからないのです。それで、日本人の学生と、その指導教官の属する学部の方の先生と、物理なのだけれど化学の方の先生に見てもらった。同じようなことを文科系の方でもやったのですけれど。最初に見ていただいた理科系の方は、これは理科系の留学生の作文、後の方は文科系の学生の作文で、金沢の方でやっているものなのですから。みんな指摘するところはバラバラなのです。ただ、バラバラなのだけれども、理科系の方があくまでも作文といってもレポートに近い作文という前提があるのです。例えば強調するものはここに持ってこいとか、文章を段落にしたときに、どこかで共通点があるみたいなのです。それが文科系の方の人達が指摘してきたときには、ほとんどバラバラなのです。どこに共通点があるのだろうということを、もしかすると見つけられなかったのかもしれないのですけれども、逆に言えば、それだけ見つけにくいということは、やはり共通性が少ないのではないかと言っていいのではと思うのです。ただ、留学生が書いたというバイアスが入ればまた別だと思うのですけれど、そういうふうにならば共通部分もあれば共通ではない部分もある。それは一つはロジックなのでしょう、それとももっと狭い意味での技術なのでしょう？

木下　書こうとすることと文章と、くっついてくると思うのだけれど、それが理科系の方はやはり、ある一つの **tendency** を持っているのです。文科系の方は自由自在でしょう。それでいいのだと思います。理科系の仕事は、ある偏りがあるのだと思うのです。文科系の世界はもっとそれが、バラバラの方を向いていていい世界なのではないですか？

柳沢　そうすると、言語を教える先生達は文科系の方で育ってきます。

木下　だから理科系の方は困るわけです。論文や説明文の書き方、英語でいえば **expository writing** の教育は是非必要だと思います。作文というと文学だと思われては困るのです。

甲斐△ 今日はこれで終わらせていただきます。先生、ありがとうございました。貴重なお話を伺って、我々は勉強になりました。